

はしめこ

この本は、工業デザイナーの秋岡芳夫さん（1920～1997年）の理念を各地で実践し、指導してきた私の経験や技術とともに、地域の人たちと話し合い、考え、感じたことをまとめたものです。

工業デザイナーの秋岡芳夫さんは、どんなに便利な社会になっても、人間が人間らしい尊厳を失わないために手の力でものを想像し、ものをつくる喜びを大切にすることが大事だと言っています。社会の発展には、手の力の文化を発揮する職人の存在が不可欠であり、その社会参加を限りなく応援し、生涯をかけてだれにもわかりやすくものづくりの社会的意味を語りかけて、導いてくれた人です。

そんな秋岡さんの後押しを受け、私が地域における木工クラフトの指導を始めて35年以上がたちます。関わった地域の数は北海道から沖縄まで、全国33か所にのぼります。教え子の数は434人。このうち木工を生業としている人は146人います。

私はどこで指導に携わるときでも、それぞれの地域のローカルカラーを大切にすること、またその地に暮らす人々と学び合い、言葉のキャッチボールを大切にすることを心がけてきました。

中でも岩手県洋野町や北海道置戸町、宮城県津山町などはその代表例で、工芸の良質な情報をもとにした新しいまちづくりに向けて、地域住民と行政が一体となって、地域内の他の産業とも連携し合って発信力を高めながら、地域デザインに取り組んでいます。

平成の市町村合併で村という行政単位は激減しましたが、農山村そのものが消えたわけではありません。林業や農業に支えられた山村は、現在、経済的には困難な課題

を抱えています。林業の経営不振で木材の伐採量が減り、山林の備蓄量が増加しているため、資源の保全には好ましい時代が続いています。国土の根幹となる林業の経営不振は解決されず、また森林の荒廃も進んでいます。

育林は、林業補助政策により、伐採後の植林を確認した上で補助金が支払われる経済ルールがあるものの、山村地域の高齢化で、植林作業そのものは困難さを増しています。木材価格が上がらないまま、伐採経費やコストは上昇する一方、さらに木材需要の新しいニーズであるバイオマス発電の燃料としての供給拡大も求められて、森林再生が進まないうちに資源の枯渇を招くという、深刻な環境問題が予測されています。

この本で提案したい山村クラフトは、こうした地域に暮らす人々が、楽しく豊かに暮らすためにあります。生活文化のデザインに視点を置くことで、足もとの木々は楽しみに変わる資源であり、木を植えることで、自分の手で再生可能な無限の循環を創造できることに改めて気がつくことでしよう。自分の手で生活スタイルをデザインする喜びと自信を持って、林業とともに、新しい令和の時代を気概を持って生きていきたいのです。

人は、だれでも森林と林業の恩恵を受けています。木は大きく成長すると、伐採して利用するには機械の力が必要となります。機械の能力に合わせて木を利用すると、大きくまっすぐなところだけが利用され、小径木や曲がった木は、廃棄されるか燃料に回されます。しかし人の手による加工を施せば、こうした部分も暮らしの道具として生かすことが可能です。

このように、木は機械の力による生産のかたちと、人の手の力による生産のかたちとは、つくられるものが違ってきます。ただ、機械力によるにしても、手の力によるにしても、その両方の立場から木の魅力を語り合えるのも、また木と人間の美しい関係のなせるところです。

地域資源である森林は、地球環境のための「保存資源」であり、森林の備蓄量を増やすには、使用量の制限が重要です。同時に人の手で木を植えることで「再生可能な資源」であり、森を愛する人々の森林再生への思いは、皆等しく熱いのです。

山村クラフトは、林業では利用できない小径部分や曲がり材を人の手で丁寧に加工作し、品格のある生活用具をつくって、100円の木から1万円の商品を生み出すことを、「手の力」で可能にする資源の有効利用です。木が人の知恵と手で磨かれて魅力を発揮する、それが山村クラフトのだいご味なのです。山村クラフトを通して、私も林業が直面する地球温暖化対策、そして多様化の一助になりたいと考えています。

本書が山村クラフトを楽しむすべての人に、何らかの参考になれば幸いです。

2019（令和元）年12月末日

時松辰夫（82才）



いろいろな樹種でつくった椀

はじめに 1

第1章 山村クラフトの歩み

大量生産の時代に「立ち止まった工業デザイナー」

秋岡芳夫との出会い 12

豊かな社会を平和に持続させるのは

「工作を楽しむ心」である

— 秋岡芳夫の「モノ・モノ運動」 12

地域おこしはオーダーメイドの

「コミュニティ生産方式」で 13

大野村での「一人一芸の村運動」の実践 15

秋岡芳夫と大野村との出会い 15

東北工業大学と連携した大野村の地域づくり 16

良質の木工品は廃材の価値を100倍にする 17

針葉樹の学校給食器にプレポリマーを導入 18

コラム 工芸とは 19

一人一芸による地域づくり

Ⅱコミュニティ生産方式 20

やっかいもののアテ材に価値を見出した

北海道・置戸町の器 22

木の文化を暮らしに取り入れるまちづくり 22

木工ろくろの導入でアテ材を生かす 22

オケクラフトの誕生と発展 23

山村クラフトとは何か 25

林業や農業との兼業に適した山村クラフト 25

副業Ⅱ裏作としての山村クラフト 25

趣味、副業、生業の違い 26

林業では市場性のない木材にも価値を生む

山村クラフト 26

コラム 暮らしと林業をつなぐ山村クラフト 27

企業型生産、組合別生産とも違う

コミュニティ生産方式 28

山村クラフトに適した「コミュニティ生産方式」 28

農山村にも都会にも求められる山村クラフト 29

良質を提供する「クラフトマンシップ」の育成 30

地域の生活文化を高めるのが目標 31

林業の6次産業化を山村クラフトから考える 32

農山村から次世代の生活価値を発信する 32

限られた森林資源を無駄なく利用できる 32

林業の6次化のメリットとは 33

コラム 林業現場の価値基準になかった風景の価値 34

同じ資源を使いながら隔たりのある林業と木工 34

広葉樹を生かす道—20年後の林業を思う 35

第2章 地域で生まれた山村クラフト作品

山村クラフトの始まり—地元ならではの素材を生かし、地域で裏作工芸に取り組む 38

見捨てられた学校林から学校給食の器を

(若手県大野村 現・洋野町) 38

秋岡芳夫がかかわりエゾマツの癖材をよみがえらせた

「白い器オケクラフト」(北海道置戸町) 40

大工さんの裏作工芸—建築の残材をミスナギドリ風の

料理へらに(島根県隠岐の島町) 41

定年退職後の裏作工芸「木札塾」—遍路旅の思い出に

(高知県四万十町) 42

小径木、曲がり材・廃材・薪用材、樹皮を生かす 42

山村クラフトの原形、スギの小枝の箸枕

(大分県北玖珠町) 42

プレポリマーで樹皮付き小径木はポウルに

枝は一輪挿しや文具に 43

臭いの強い松ヤニ材も琥珀色の器に(広島県宮島町) 44

街路樹の廃材を森林ボランティアが

手づくりの器に(静岡県伊豆市修善寺温泉) 45

朽ちても美しい老梅木の器

「ウメ、クリ植えて」から数十年(大分県大山町) 46

生木も樹皮付きで皿や鉢・ポウルに 47

樹皮を生かしたシラカバの白いサラダボウル

(北海道置戸町) 48

サクラ並木の風倒木を生かして100年のまちづくり

(山形県鶴岡市温海温泉) 48

庭師の心が生んだ「庭の木クラフト」

屋敷林・街路樹・剪定枝を生かす(宮城県仙台市) 49

見捨てられる小枝の魅力を取り込んだシュガーポット

(由布市・アトリエときデザイン研究所) 50

樹園地更新の廃木でつくる「くだもの器」

(山形県上山市) 50

地元の高原野菜が映えるサラダボウル(長野県飯田市)

枝打ちしたスギの廃材でつくる「梢の器」

(由布市・アトリエときデザイン研究所) 52

日常の気つきを形にする 53

冬の降雪期の副業に木工を—肩たたきと孫の手

(若手県二戸市) 53

地味めの生活用具をおもしろく〜鳥の靴ペラとその
 スタンド (由布市・アトリエときデザイン研究所) 53

食卓で製造過程が思い浮かぶ「一夜漬けの器」
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 54

高齢者にも重さが気にならない「ラーメンどんぶり」
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 54

環境にやさしく、使用後は土に還る植木鉢
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 54

忘れ物に気づく、イヤリングと指輪のためのスタンド
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 56

傷つきやすい桐の座卓が扱いのやさしさを育む
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 56

伝統と現代技術の融合……………58

曲げわっぱ十成形曲げ加工で「笑つえびす弁当」
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 58

「成形曲げ加工」で洗練された造形の曲げわっぱ
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 59

伝統の大館曲げわっぱにろくろ加工
 (秋田県大館市) 60

パンや料理を盛る「浅いお櫃」を能代の桶樽技術で
 (秋田県能代市) 60

高速回転の刃によるルーター加工の器
 ルーター加工・楕円のクッキー皿、パン皿
 (秋田県能代市) 63

スギの間伐材でつくる綾織盛皿
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 71

スギの間伐材を矢羽根集成材にした「ツヤマボード」
 (宮城県津山町 現・登米市) 71

重ね切りの板を張り合わせた木の葉のベンチ
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 73

地域素材を生かす……………75

リュウキュウマツでつくる「ミーフギチャダイ」
 (沖縄県石垣市) 75

海岸沿いのクロマツで食器づくり
 (茨城県大洋村 現・鉾田市) 76

150の樹種からなる広葉樹林を生かした
 「101種類の木の椀」
 (島根県匹見町 現・益田市匹見町) 76

町のピンチから生まれた鷺沢のあかり
 (宮城県鷺沢町 現・栗原市) 77

島の天然ヤブツバキでつくる生活木工品
 (長崎県土佐島町 現・新上五島町) 78

水源林のスギ丸太でつくる水紋皿 (東京都奥多摩町)
 竹を生かす……………79

ろくろ加工でつくる竹の箸立てや花立て
 (大分県別府市) 80

竹を煮沸してつくる曲げ丸盆と角盆
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 81

ルーター加工〜大野村の長方形の調味料トレイ
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 63

相似形仕立てが容易なルーター加工で花盆
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 63

ルーター加工で彫り抜きした
 「スイーツ列車」のランチボックス
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 64

生木をプレポリマーで加工したニマの器
 (熊本県熊本市・熊本県伝統工芸館) 64

原点回帰、弥治郎こけしの技で箱づくり
 (宮城県白石市) 66

農林漁家の営みを支援する……………67

稲作の継続を支える米「ゆきむすび」のおむすびが
 映えるえびす盆 (宮城県大崎市鳴子温泉) 67

豊穣を祝う稲わらの器 (山形県真室川町) 67

魚付き林の廃材を使った元漁師たちの器づくり
 (宮城県唐桑町 現・気仙沼市) 68

張り合わせの楽しみ……………69

端材を矢羽根模様にした卓上用くず箱
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 69

表具師の伝統技術「重ね切り」を曲線加工に生かす
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 70

風倒木や間伐材でつくる「幸せの木の葉皿」
 (大分県中津江村 現・日田市) 70

形状のおもしろさ……………81

葉の形をデザインにした、カツラのバレンタイン
 ハート皿 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 81

虫食い穴が楽しい立食パーティー用の器
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 81

ろくろがなくてもつくれる、細いすきま皿
 (由布市・アトリエときデザイン研究所) 82

第3章 山村クラフトの技法

木材の入手から乾燥・木取りまで……………84

材料をどう入手するか……………84

半割丸太工法でどんな木も100倍の価値を生む……………85

半割丸太工法に欠かせない木材の乾燥……………86

除湿乾燥が最適、電子レンジの活用もおすすめ……………87

木工ろくろを活用した山村クラフト……………88

山村クラフトに適した木工ろくろ加工……………88

木工ろくろを使って椀木地を加工する……………89

木取り……………89

荒挽ぎ (荒削り)……………90

荒乾燥……………90

中挽ぎ……………91

仕上げ乾燥	91
仕上げ加工	91
木地加工に必要な機械と工具	92
原木からの木取りに使う―帯鋸	92
形状をつくり出す―木工ろくろ	92
木地を固定する―ペンチ・平ヤスリ	94
ろくろ鉋や仕上げ刃物の鍛造方法	94
加工しながら内・外径を測る―外パス・内パス	97
形状の確認に使う―シナベニヤ	97
仕上げの研磨に使う―サンドペーパー	97
木工具の安全基準と取り扱い	99
山村クラフトの強い味方「プレポリマー」	100
プレポリマー(産業用木固め剤)のすぐれた特徴	100
―木材の水分管理を容易に	100
プレポリマーの塗装方法	101
安全安心な食器製作	106
木工塗料を安全に使うために	106
―安全基準と取り扱い法	106
安全安心な食器製作のために―衛生管理の注意点	108
山村クラフト製作方法の一例	109
炒めペラの製作方法	109
10年たつてやっと始まる	125
―地域の反発とどう付き合つか	125
売り方をデザインする	126
「商品」を生産する	126
「売る」とは社会と連携すること	126
商品生産の向こう側にあるサービス生産	126
商品の基準を設ける	128
売る場所を選ぶ	128
使い手の希望に触れる展示会を企画する	129
展示会に関わる作業	129
値段をつける	131
販売経費が重要	131
価格の設定	132
長く愛用される良質な品格に、改良を惜しむな	135
道具づくりができるというこころ―修業時代とは	135
技術自慢ではないクラフトマンシップと提案力	136
時代に合った生活用具をつくる	136
地域のデザイン	137
地域との関係性の中にあるデザイン	137
コラム デザインは意匠ではなく設計である	137
地域の環境や素材を生かす	138

第4章 山村クラフトの ブランドデザイン

輪切りのコースターのつくり方	111
果樹の枝を使った箸のつくり方	111
木工ろくろを使わないニマの器のつくり方	113
人を育むデザイン	118
人間の尊厳を守るクラフトマンシップ	118
クラフトマンを育てる	118
コラム クラフトへの情熱がたぐ地域と大学	119
デザインのセンスを磨く	120
設備・技術よりも大事な美的センス	120
デザインセンスを磨く3つのポイント	120
見て知るかたち、自然の中に学校はある	121
描いて知るかたち、線のデザイン	121
比べて知るかたち	122
地域ストーリーをデザインする	123
四季・旬・節句・祭り 暮らしの知恵	123
好きの持続と関心度	124
生活の中で繰り返す、習慣の環境をつくる	124
主原料の選択	138
地域に合った技術を探す	139
コラム 使い手には間伐材も廃材も関係ない	139
まちづくりは「風景」と「おいしいもの」のふたつが大切	141
森を守る地域経済は国土と地球を守る	142
コラム 実演・注文・販売もする	143
生活情報館としての熊本県伝統工芸館	143
コラム 比べて知るかたち	144
―デザインを磨き、技術を向上させる道	144
あとがき	145
教え子から見た時松辰夫	147
山村クラフト情報拠点	150